

平成 22 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 年度～2009 年度
 課題番号：19520562
 研究課題名（和文） 世紀転換期における国民・ジェンダー規範の形成
 —トランス・ナショナルな視点から—
 研究課題名（英文） Formation of National and Gendered Norms
 in the Turn of Twentieth: Transnational Approaches
 研究代表者
 加藤 千香子（KATO CHIKAKO）
 横浜国立大学・教育人間科学部・教授
 研究者番号：40202014

研究成果の概要（和文）：

本研究では、まず世紀転換期における特徴的な国民規範形成のプロセスの検証がなされた。日本における「青年」の構築と組織化、アメリカでの性にかかわる問題、ドイツにおける「少子化」問題、イギリスでの黄禍論や「武士道」概念といった焦点を浮かび上がらせ、それらが同時代の世界との緊密な関係のうに登場したことが検証された。他方、国民規範が企図した社会秩序の安定化については、必ずしも果たされたわけではないことも明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：

This project studied how Japan, the United States, Germany, and the Britain defined and transformed respective nationality in the turn of the twentieth century.

In particular, it paid attention to the role of “youth” concept and social organization in Japan; gendered norms in the United States; declining birthrate in Germany; and the Yellow Peril fever and the circulation of “bushido (Japanese samurai’s code of honor)” idea in Britain. These topics demonstrate how deeply transnational network of thoughts and information affected seemingly distinctive nature of each nationhood. Meanwhile, it is noteworthy that those norms did not always help stabilize social orders of those nations. Given their trans-national developments, those ideas unintentionally yet often imposed questions on what the nationhood meant.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近・現代史

1. 研究開始当初の背景

本研究を分担する4名は、これまで個別に日本・英国・米国・ドイツの世紀転換期の政治文化に関する歴史研究に取り組んで来た。その経緯のなかで、各自が眼を向けてきたのは、国民統合の問題と性や人種・民族といったカテゴリーが各国の政治文化において占める位置や果たした役割、その変動過程である。

加藤千香子は、日本社会の近代化過程と国民化の問題を地域社会の側から検証する研究を進め、地域社会近代化の担い手としての「公民」の形成と「他者」への差別的なまなざしについて注意を向けてきた。松原宏之は、20世紀初頭の米国を対象とし、人種・階級・ジェンダーの視点から具体的な政治文化構造の変容過程の解明に取り組んできた。橋本順光は、世紀転換期の英国社会において影響力を広げたオリエンタリズムや黄禍論に関する研究蓄積をもつ。小玉亮子は、ドイツ近代のジェンダー構造を問題としてきた。

本研究メンバーは、横浜国立大学の教養教育・総合領域科目「差異を生きる」の担当や、公開講座「ジェンダーと家族」での企画運営を行う中で研究・教育の緊密な交流を行い、問題意識の共有を進めてきたが、その過程で各自が取り組む一国史の枠組みを超え、比較やトランス・ナショナルな視点を打ち出す歴史研究を構想した。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀末から20世紀初めの世紀転換期を中心にすえながら、近代世界の社会像をトランス・ナショナルな視点からとらえる構想の一環をなす。具体的な目的は以下の2点である。対象とした4国は日・英・米・独である。

(1) 第一の目的は、各列強諸国内で対外戦争を契機とする愛国主義の高まりとかがわって構築される国民・市民規範について明らかにすることである。国民国家的統合は当該期の各国で格段に進んだが、それを支えた国民道徳や国民規範にかかわる言説がどのようにつくられたのか、そのプロセスと内容を検証することを課題とした。特に留意するのは、各国の国民道徳や規範にかかわる言説が、一国内にとどまらず、連鎖・波及を伴って共時性をもって世界規模で展開し相互関係性をもっていたことである。

(2) 第二の目的は、そのような愛国主義の高まりや国民道徳・規範言説の形成が、各国の社会においてどのような影響をもたらしたのか、当時の政治文化にどのような面を刻印したのか、具体的事例に即しながら検証することである。国民・市民規範形成の動きは、「生存競争」を正当化する社会ダーウィニズムを支えとしながら、階級・民族・人種・性差等を根拠とする社会の境界や、非「国民」や劣等者といった「他者」の存在を浮かび上がらせざるを得ない。まずこうした「差異」構築の点に着目する。また、その社会的影響については、定着や浸透、同調のみならず、呼び起こされる反発や対抗運動にも留意しなければならず、また規範言説と実態との乖離に着眼することも重要である。そのため、世紀転換期に限定せず、以後の歴史過程を広く視野に入れた考察を重視することとした。

3. 研究の方法

全年度を通して力を入れたのは、世紀転換期の日米英独各国における文化的・社会的風潮についての全体像を概観するために、その基礎となる文献収集・調査及び分析を行った

ことである。

調査は、まず、当時各国で発行されていた新聞、雑誌などのジャーナリズム・メディアを対象とし、年代は、1880年代から第一次世界大戦をはさんで1920～30年代にまで及んだ。それらのメディアに掲載された、愛国心や国民性、国民道徳にかかわる議論だけでなく、ジェンダー・人種・民族をはじめ「他者」構築にかかわる言説、それらにかかわる運動や政策についての記事を網羅的に収集した。国内の諸大学の図書館・資料館はもとより、合衆国・イギリスの図書館・資料館にもおよんだ。

さらに、そうした各自の調査結果をもちより、研究交流を行いながら、成果の共有化をはかった。

4. 研究成果

(1) 日本を対象とした加藤千香子は、近代日本で生れた「青年」概念が、日露戦争後の国民統合過程で大きな役割を果たしたことに注目するとともに、その後1920年代以降の日本社会において生じた「青年」をめぐる対抗・せめぎあいの過程についての検証も行った。

日本における「青年」の奨励・組織化は、青年団運動として展開されたが、それは、イギリスのボーイスカウト運動やアメリカでのYMCAの影響を受けて立案され、第一次大戦期にはドイツ視察を行った田中義一の下で強力に進められることとなったものである。内務省・文部省の強力な奨励策によって全国的に設立が進められた青年団は、「風紀矯正」の担い手として国民道徳の涵養の主体と位置付けられていくが、鼓舞される「青年」像は、男性主導のジェンダー観念や老年世代に代わる社会の担い手としての世代観念を含むものであったことを指摘した。他方、

国民統合のための地域秩序の担い手としての「青年」の呼びかけに呼応する主体にも注目し、実際に展開された地域秩序変容を進める動きについても論じた。

さらに、規範としての「青年」をめぐるせめぎあいの様相について、1920年代における「農村青年」運動を対象に行った。第一次大戦後の日本社会は、急激な都市化と農村との間のギャップを特徴とし、それを背景とする農村の窮乏（「農村問題」）が社会問題化していたが、「青年」には、農村社会の救済者としての期待がかけられることとなった。近代の道徳規範を体現した「青年」が、現実の社会問題の中で呼びかけに応じ主体化するなかで社会的せめぎあいを生ずる、そうした過程について具体的な検証を行った。この課題に関しては、西洋史学会第58回大会(2008)で独・仏・ソ連・米・日本史研究者が合同でもった小シンポ「<近代の知>をめぐるせめぎあい」において、分担者の松原宏之とともに発表を行っている。

(2) イギリスを対象とした橋本順光は、日露戦争後および第一次世界大戦後の二つの時期に注目し、国民規範をめぐる日英の相互交渉を調査した。

日露戦争期については、武士道という概念が、英国で国民規範をめぐる運動に援用されたことを、本科研報告書で発表した。第一の理由として、ボア戦後の英国での国民国家効率化(National Efficiency)運動を挙げ、帝国記念日(Empire Day)運動やボーイスカウト運動での言及に触れた。第二の理由として、道徳教育を宗教教育から切り離し、歴史と体育を必修化することで、愛国心の涵養しようとした教育改革との連動を指摘した。なお、その文脈で重要なヴィヴィアン・グレイの『大英帝国衰亡史』の本文と明治時代の

翻訳とは、すでに紀要論文で復刻し、CiNiiを通じて全文公開している。

関連して、英国での柔道の流行を調査し、それが女性参政権運動家の自衛策として採用されたこと、またガンジーの無抵抗主義が柔道の隠喩で理解されたことなどを、代表者が編集する書籍で発表した。日露戦争については、脚気による多数の死者のため批判が多い日本軍の衛生政策が、病死者が戦死者を下回ったとして、むしろ英米で過大に評価された経緯を明らかにした。その際に、アメリカの従軍記者と日本人協力者が、大きく関係した事を指摘した。この点については、今後、別途、発表する予定である。

戦間期については、H・G・ウェルズの『世界史概観』(1920)をとりあげ、シンポジウム報告書で発表した。ウェルズがいう「世界市民」への善導のために「世界史」が召喚された衝撃と同時に、それが古典語の必修廃止などの教育改革や、一国史観をめぐる同時代の歴史家の論争といった伏流する運動と連動していたことを指摘した。あわせて、これらウェルズの楽観に対してジョージ・オーウェルの反論がすでによく知られているが、そのアメリカ論批判が不正確であり、ほぼ同じ反論がすでに歴史家のクリストファー・ドーソンによってなされていた事実を発掘した。

(3) アメリカを対象とした松原宏之は、20世紀初頭の性衛生学・社会衛生学が、一方で国民の規律を進めつつ、他方で国内外の諸潮流と干渉しあう複雑さに着目した。

このとき性衛生学は、アメリカの秩序・社会関係への挑戦を支持する役割を担いする。性衛生学・社会衛生学運動の展開を、ニューヨーク・シカゴを中心とする1910年代アメリカ国内でたどると、それは都市民の社会生活へと介入する絶好のテクノロジー

ともみえる。しかし国外や、アメリカ国内であっても地域や都市や担い手の多様性をみると、性衛生学の意味や役割が異なるのがうかがえる。ことによっては干渉を呼び込み、それはアメリカにおける秩序の壊乱要因ともなっていく。国内外をまたぐ「トランスナショナル」な視点を導入すると、性衛生学は均質で一体的な近代空間を想定したときとは異なる多義的なふるまいを見せるのである。

本科研報告書に寄稿した論考では、一次大戦期にアメリカ政府が後押しした性病予防キャンペーンが、ソーシャルワーカー、女性行政官、女性医師たちに全国的な活躍の場を思いがけず提供する過程をあきらかにした。健全な兵士をヨーロッパ大陸に送り出すというウィルソン政権の国際公約が、国内において女性オフィサー、ワーカーらが社会衛生学を領有して自らの地位向上を可能にしていく。そのことが、医科学的権威のありかや、社会政策の担い手とその正統性の所在についても議論を呼ぶのであった。

本研究の一部は、西洋史学会第58回大会(2008)での小シンポジウム「<近代の知>をめぐるせめぎあい」において、加藤とともに発表を行っており、イギリス、ニュージーランド、サンフランシスコ・カリフォルニアを結ぶ性衛生学の流通と変種については別途報告の予定である。

(4) ドイツを対象とした小玉亮子は、19世紀末以降重視されるようになった出生率の低下問題を中心に検討をおこなった。

20世紀初頭のドイツの少子化の問題化は多様な方面から論じられたが、その中で興味深いのは、ドイツにとっての重大な損失である少子化の原因が、ドイツの女性の在り方の問題として議論された局面で、日本が登場し

てきた点である。ドイツの人口問題研究者が、滞独日本人知識人の言葉をかりて、社会進出をもくろむドイツ女性をいわば利己主義的であるとして批判し、対して日本女性は、家庭的であり母性的であるという議論を展開した。非西欧女性の典型としての日本女性像は、出産や育児をいとわない女性として、美化されたが、それは、非職業人であり、家庭にとどまるという点における美化であったことが明らかになった。1930年代には、少子化問題はヨーロッパ全土をまきこんで、ドイツでは、国際人口会議が開催されることになるが、欧米各国とならんで、日本についての発表もおこなわれ、人口をキーワードにヨーロッパ内で日本への関心も高まっていることが史料からしめされ、この点については、今後とも分析を進める予定である。

また、近代ドイツにおける教育の展開をジェンダーの視点から分析検討もおこなったが、教育制度にかんして、直接日独比較をおこなってはいないが、女性の教育の高等教育化が、男性を支える妻・母という限定の限りでの展開であったことがあきらかになり、この点は、ドイツにおける人口問題をめぐる議論と軌を一にすることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 15 件)

- ① 小玉亮子、少子化、ナショナリズム、ジェンダー—1910 年代のドイツにおける出生率低下問題から—、比較家族史研究、査読無、24 巻、2010、1-20
- ② 加藤千香子、日露戦後における「青年」の主体的構築、歴史評論、査読有、698 号、2008、29-43
- ③ 加藤千香子、「男性史」と歴史学、歴史学研究、査読有、844 号、2008、42-50
- ④ 加藤千香子、統合と差異を問う視点—世

紀転換期研究の新たな課題を探る—、女性史学、査読有、16 号、2007、123-130

⑤ Matsubara, Hiroyuki、Sometime Allies, Sometime Competitors: Men and Women in the Commission on Training Camp Activities, 1917-1919、The Proceedings of the American Historical Association 121st Annual Meeting、査読無、10485 号、2007、1-13

⑥ 小玉亮子、ヴァイマル憲法第 119 条の成立—国制に家族はどう位置づけられたのか—、比較家族史研究、査読有、21 巻、2007、1-23

〔学会発表〕(計 11 件)

- ① 橋本順光、黄禍論の歴史学—英国における東西人種闘争史観とその系譜—、メトロポリタン史学会第 5 回秋季シンポジウム、2009 年 11 月 28 日、首都大学東京
- ② 小玉亮子、近代ドイツにおける家族と国家、そして、第三項—教育史における家族研究の射程—、教育史学会、2009 年 10 月 10 日、名古屋大学
- ③ 橋本順光、臨界期のジャポニスム—日露戦争後の英国における武士道と柔道の受容—、ジャポニスム学会、2009 年 7 月 11 日、文化女子大学
- ④ 小玉亮子、少子化・ナショナリズム・ジェンダー—20 世紀初頭ドイツにおける少子化問題と家族—、比較家族史学会、2009 年 6 月 29 日、大阪大学
- ⑤ 加藤千香子、近代日本における「青年」の構築と戦間期「農村青年」運動、日本西洋史学会第 58 回大会、2008 年 5 月 11 日、島根大学
- ⑥ 松原宏之、20 世紀初頭アメリカにおける性衛生学者の難渋—近代社会の競合と混成一、日本西洋史学会第 58 回大会、2008 年 5

月 11 日、島根大学

⑦ 加藤千香子、「帝国の青年」と男性性、「歴史と人間」研究会、2007 年 12 月 16 日、一橋大学

⑧ 橋本順光、「Imperial Gothic」としての黄禍論—H. G. Wells, “The Lord of the Dynamos” (1894) を中心に一、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2007 年 11 月 17 日、日本大学

⑨ 小玉亮子、近代教育をジェンダーから再考する、日本ドイツ学会第 23 回、2007 年 6 月 23 日、明治大学

〔図書〕(計 5 件)

① 加藤千香子,橋本順光,松原宏之,小玉亮子、近代世界における国民・ジェンダー規範の形成 (科学研究費補助金成果報告書)、2010、65

② 加藤千香子,橋本順光,他、明石書店、ジェンダー史叢書 5 暴力と戦争、2009、317

③ 加藤千香子,他、新曜社、日本における多文化共生とは何か—在日の経験から—、2008、254

④ 加藤千香子,他、青木書店、東アジアの国民国家形成とジェンダー—女性像をめぐって—、2007、384

⑤ 小玉亮子,他、春風社、現在と性をめぐる 9 つの試論—言語・社会・文学からのアプローチ—、2007、297

6. 研究組織

(1)研究代表者

加藤 千香子 (KATO CHIKAKO)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：40202014

(2)研究分担者

橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITSU)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：80334613

松原 宏之 (MATSUBARA HIROYUKI)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：00334615

小玉 亮子 (KODAMA RYOKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学

研究科・准教授

研究者番号：50221958